久保天随の新訳をめぐる分析

王　超　恒

Analysis of the new translation of Kubo Tenzui

WANG Chaoheng

Abstract

This paper focuses on the *Romance of the Three Kingdoms* and the *Outlaws of the marsh* translated by Kubo Tenzui. The *Romance of the Three Kingdoms* comprises the main part, and the *Outlaws of the marsh* supplements it. Compared with the translations of Edo era, it focuses on analyzing its translation features and inheritance. The first chapter briefly describes the history of their acceptance in Japan. It clarifies that Kubo's translation is the first new translation since Meiji period (1868-1912). The second chapter describes kuobao's life and details his translation works. Chapter three and chapter four respectively analyze the translation features of Kubo's version. The main feature is to be as faithful to the original as possible. Finally, the fifth chapter comprehensively analyzes the reasons for its rapid disappearance in the times from the internal and external aspects.

Keywords：Kubo Tenzui, Japanese translations, Romance of the Three Kingdoms, Outlaws of the marsh

キーワード：久保天随、日本語訳本、三国志演義、水滸伝

はじめに

中国の白話小説の中で、日本の人々に最もよく知られ、後世多くの作家に素材として使われたものと言えば、「四大名著」[1] が挙げられる。その中で、『三国志演義』と『水滸伝』が成立した時代は、他より早く、元末明初のほぼ同時期である。一般的に、『三国志演義』の著者は羅貫中、『水滸伝』の著者は施耐庵とされるが、施と羅は師弟の関係で、『水滸伝』の部分内容は羅が補足したとも見なされている。日本における白話小説の受容史を見れば、『三国志演義』と『水滸伝』の受け入れは他の白話小説より、率先して行われた。さらに、翻訳をはじめとして、絵本、洒落本が大量に創作され、関わる物語も歌舞伎、浄瑠璃に採用され、江戸文学に大きい影響を与えたと考えられる。

江戸時代、幕府は外国との自由な貿易を禁止する「鎖国」政策をとっていた。ただし、オランダと中国は例外的に交流を認め、長崎を窓口として様々な物資が日本に流れ込んでいた。『三国志演義』と『水滸伝』もこの時期に、ほかの漢籍と同様、長崎を経由して日本に伝わってきた。最初は唐話学習の教材として上層知識人向きの書物であった。

日本最初の『三国志演義』の翻訳はというと、徳田武の研究に拠れば[2]、中江藤樹の著作と推定される『為人抄』（寛文２年、1662年、河野道清刊）という書物が最も古いものである。その中に『三国志演義』の「連環計」と「孔明の南征」に関する話が部分訳として載せられている。また、最初の翻訳は、湖南文山が元禄２年（1689年）から三年間にわたって訳した『通俗三国志』である。『通俗三国志』の刊行については、元禄４年（1691年）９月に西川嘉長なる人物の賛助を得て、京都の書肆栗山伊右衛門によって刊行され、その後も寛延、天明と版を重ねロングセラーとなった。中村幸彦氏の研究に拠れば[3]、京都の飾屋であった西川嘉長が対馬藩に滞在した際に、以酊庵で輪番僧が『三国志演義』の講釈を行っているのを聴いて、『通俗三国志』の刊行を思い立ったのだという。

『水滸伝』について、訳本の出現は『三国志演義』より遅く、最初のものは和刻本『忠義水滸伝』初集（亨宝13年、1728年）であり、内容は前十回まで、施訓者は元唐通事の岡島冠山である。和刻本『忠義水滸伝』は『水滸伝』原文に訓点を施したもので、厳密に言えば、翻訳と言えない。日本語翻訳の刊行は、1757年のことであった。植村藤右衛門、吉田四郎右衛門などの書肆より出版した『通俗忠義水滸伝』初編である。その後、1772年に中編、1784年に下編、1790年に拾遺、『通俗』は完成された。そのほか、『水滸伝解釈』（1727年）、『忠義水滸伝解』（1757

1）『三国志演義』、『水滸伝』、『西遊記』、『紅楼夢』。
2）徳田武「本邦最初の『三国演義』の翻訳」（『明治大学教養論集』、巻340、2001年）、１-13頁。
3）中村幸彦「書誌聚談」（『中村幸彦著述集』、巻14、中央公論社、1983年）、289頁。

年）等の関連書物があり、それは『水滸伝』に関するそれぞれの講義の語釈である。[4)]

明治以後、日本における『三国志演義』と『水滸伝』の受容は類似の軌跡で発展した。明治時代から、江戸時代の軍談・講話の継承とする歴史小説が現れ、次第に推理小説とともに、大衆文学の重要な一部分になった。例えば、『三国志演義』の場合は、1897年、内藤湖南の『諸葛武候』を皮切りに、『三国志演義』の再話が大量に生み出され、更に20世紀30年代日中戦争期の中国に対する関心の高まりを契機に、「三国志」の話題はブームになった。1939年吉川英治が連載を開始した『三国志』[5)] は、『三国志演義』再話のトップだと多くの研究者に認められている。一方、江戸時代から伝えられた『通俗三国志』と『通俗忠義水滸伝』は二十世紀に入ってもなお盛んな人気を保ち、各校訂版が出版され続けた。

この背景で、久保天随は初めて、江戸時代の『通俗』を脇へ置き、改めて『三国志演義』と『水滸伝』を翻訳した。しかし、筆者の調査によれば、久保の新訳に関する研究は少なく、まるで忘れられた訳本のようである。久保の訳本は他の訳本と継承関係があるかどうかということ、あるいは久保が『三国志演義』と『水滸伝』を改めて翻訳した背景、翻訳特徴など、不明な点が多くある。また、久保自身の訳文を比べると、翻訳特徴も変化していたようであり、翻訳態度や翻訳観がどのように影響したのかも興味深い点である。

そこで、本論は、久保天随の『新訳演義三国志』（1911・1912）及び『新訳水滸全伝』（1911・1912）を対象に、特に『三国志演義』を主たる分析対象とし、『水滸伝』はそれを補強するものとして位置づけ、訳文を『通俗』と比較し、分析することで、両者の継承関係、久保天随の経歴と翻訳特徴、及びこの訳本が時代に消えた原因を探究し、翻訳史の一端を補足したい。

一　久保天随について

管見のかぎり、久保天随の生涯と著書につて述べ及んだ研究は、山村吉廣の「久保天随の生涯と詩集」[6)] や森岡ゆかりの『近代漢詩のアジアとの邂逅――鈴木虎雄と久保天随を軸として』[7)] など複数があるが、よく参考されるのは、昔久保天随の教えを受け、台湾大学文学院中文系の教授を務めた黄得時が著した「久保天随博士小伝」[8)] である。ここで、「小伝」に基づいて久保の生涯を今一度振り返る。

久保天随は明治八年（1875年）七月、旧東京市下谷区徒士町和泉橋で生まれ、長男であるが

4）中村綾『日本近世白話小説受容の研究』（汲古書院、2011年）、90頁。

5）吉川『三国志』は1939年から1943年までほぼ４年間連載され、戦後に単行本として刊行され、絶大な人気を博した。基本的なストーリーラインは中国の歴史小説『三国志演義』に従いつつも、特に人物描写は日本人向けに大胆にアレンジし、今日までの日本における三国志関連作品へ多大な影響を及ぼした。

6）村山吉廣「久保天随の生涯と詩業」（『中国古典研究』51、2006年）、82-94頁。

7）森岡ゆかり『近代漢詩のアジアとの邂逅――鈴木虎雄と久保天随を軸として』（勉誠出版、2008年）。

8）黄得時「久保天随博士小伝」（『中国中世文学研究』、巻２、1962年）、48-53頁。

藩主の命により、父の藁科姓ではなく、母の久保姓を名乗ることとなった。久保天随の本名は得二、号は天随のほか、青琴、兜城などがあるが、大抵の場合は「天随」を用いた。「天随」の号は『荘子』在宥篇「神動而天随」の句により、久保が十四、五歳の時自ら選んだものである。

久保天随は横浜市の師範学校附属老松小学校に学んで、そして杉浦重剛の日本中学を経て仙台の旧制二高に進み、明治三十二年（1899年）に東京帝国大学文科大学漢学科を卒業した。卒業後約二十年間、久保天随は定職に就かず、拘束されるのを嫌ったのと、吃音のため社交を避けたことという理由で、「繁忙にして或は無意味に近い売文生活」[9] を過ごした。初期の文章は「帝国文学」に発表し、主に中国の文芸の評論、そして紀行文と漢詩も次々と掲載された。久保天随は「赤門文士」の一人として活躍し、次第に文壇に知られることになった。当時、新しい鉄道を敷設していた鉄道省は観光客を招くため、久保天随などの文人に、全国どこへでも行ける優待券を配り、美しい紀行文を書いてもらうことを依頼した。こうして、久保天随の全国旅行の時期が始まった。一方、この「売文時期」に久保天随はまた漢籍や漢詩の注釈・翻訳などの仕事をこなし、関する著述も多く出版された。

大正五年（1916年）久保天随は大礼記録編纂委員会嘱託となり、八年には宮内省図書寮嘱託、九年には同編修官となった。職務で、久保天随は内閣文庫の蔵書を自由に閲覧することができた。これは久保人生の転機となり、膨大な中国文学の原始資料と接触できた。久保は売文生活を離れ、次第に学術研究を志すようになった。中国戯曲方面の研究が、これをきっかけに始まった。大正六年（1917年）からの数年間、久保天随は「西廂記の解題」、「西廂記雑考」などの文章を次々と発表し、好評を博した。昭和二年（1927年）、久保天随は論文「西廂記の研究」を東京帝国大学に提出し学位を申請し、文学博士を授けられた。翌年台北帝国大学が新設され、昭和四年（1929年）四月に久保は台湾に赴き、同大学文政学部東洋文学科の教授に就任することになった。台湾時代には、久保が福州、澎湖、琉球など各地へ旅行し、紀行文と漢詩を多く著した。また、久保は同地の日本人の漢詩人及び台湾人の魏潤庵らとともに、「南雅社」という詩社を結成し、詩人として活躍していた。昭和九年（1934年）、久保天随の居宅の近くに落雷があった。病臥中であった久保は落雷に伴う大音響の衝撃を受け、脳溢血を起こして59歳で永眠した。墓は東京多磨霊園11区１種３側３番にある。

久保天随と言えば、人によく知られているのは漢詩人、または中国戯曲研究者としての久保天随であり、ほかの方面への貢献はあまり後世に知られていない。久保の出版物を整理して見ると、久保天随の大半の著書は「売文時代」に集まっており、内容も広く、美文、文学評論、東西人物伝記、日中韓三国史、翻訳、言語、教育など、多くの分野が含まれている。簡単に計算すると、久保は「売文時代」に70超えの著書を出版し、つまり、毎年４冊ぐらいの高効率で本を出していた。そこには久保の勤勉と博学の一斑が見える。しかし、多くの著書はあまり後

9）久保天随自身のことば、『支那戯曲研究』後記・昭和３年９月刊による。

世に知られず、出版された『支那文学史』などの研究書も当時の学界に重視されなかったようである。学問を探求する久保天随は、たぶんこのような生活に満足しておらず、「この繁忙にして或は無意味に近い売文生活」と自嘲し、突破を求めていただろう。

1916年、久保は大礼記録編纂委員会嘱託となった。このチャンスは久保を変えたのか、あるいは久保がずっとこのチャンスを探したのか、もう分からないことになったが、間違いなくこれをきっかけに久保は売文生活から学術研究に足を踏み込んだ。1916年以降、久保の著作は急に減少し、内容も主に中国戯曲に関する研究と漢詩である。

1916年まで、久保天随の翻訳作品は僅か７作品あり、その中で欧米文の翻訳は５作品[10]、漢文の翻訳は２作品ある。久保の漢籍に関する著書を見ると、四書五経や漢詩などの注釈が多く、翻訳は『三国志演義』と『水滸伝』しかない。専門の翻訳者と比べれば、久保は翻訳に関する作業に多少触れたが、決して本業ではなく、経験も豊富と言えないだろう。

久保天随の翻訳作品を全体的に見れば、西洋文の翻訳について、久保はあまり字句に拘らず、以前にはその西洋作品の日本語訳がなかったため、作品を読者に紹介することを第一目的とした。作品によって、多様な訳風が見られる。しかし、久保は自分の本業である漢文学については、ある執着心を持っていたようである。『新訳水滸全伝』にも『新訳演義三国志』にも、以前の訳本を批判したうえで、「必ず原文に従い、逐語訳す」ということを再三に強調し、自分の訳本に対して「集めて之を大成したるものといふべく」「旧訳に比すれば、全く面目を一新したるを確信す」[11] と自負している。では、久保天随の新訳は、具体的にどのような特徴があるのか。

二　『新訳演義三国志』と『通俗三国志』の比較

『新訳演義三国志』の前に，久保は1906年に『三国志演義』という評釈本を出版したことがある。本書は「支那文学評釈叢書」[12] の第一巻として、隆文館より出版された。久保天随が毛宗崗本[13] を底本として、自分が思う『三国志演義』の名場面10則、約十数章の内容を取り上げ、直

10）①『酔人の妻』（Lienhard and Gertrud）、スイスの教育家であるペスタロッチ（Johan Heinrich Pestalozzi）が自分の教育理念を貫いて著した小説であり、または『リーンハルトとゲルトルート』と呼ばれる。②『教授新論（ウィルマン氏）』（Willmann）、プラハ大学教授オットー・ウィルマン（Otto Willmann）が1867年、ライプチヒ大学で開催された教育学会において講演の筆記である。③『譬喩談　家庭教訓』（Fabeln）、ドイツの文豪レッシング（Gotthold Ephraim Lessing）の寓話集である。④『寒村行』（The Deserted Villaga）、英国の詩人ゴールドスミス（Oliver Goldsmith）の詩集である。⑤『うえるてる』（The Sorrows of Young Werther）、ドイツの文豪ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）による書簡体小説である。

11）久保天随『新訳演義三国志』上（至誠堂、1911年）、叙説による。

12）全六巻、第二巻から第六巻まで各は『李杜』、『荘子』、『白氏文集』、『韓非子』、『水滸伝』である。久保が執筆したのは『三国志演義』のみである。

13）康熙（17世紀）年間、父の毛声山は李卓吾本を元に各書を選択し、『三国志演義』の改訂に取り組んでいた。毛宗崗はそれを引き継いで、記事や文章の誤りを正し、自らの評価を挿入して毛宗崗本を完成させた。

訳し、さらに文章の間に評語と解読を加えた。取り上げられている名場面は、「王允連環の計」、「曹操酒を煮て英雄を論ず」、「関羽五関六将を斬る」、「草蘆三顧」、「赤壁曹操の敗」、「先主猇亭の敗」、「孟獲の七擒」、「街亭の戦」、「五丈原諸葛の薨去」である。本書は、書簡や上表文が翻訳されたが、原文の俗語の類は、翻訳せず、全て傍訓を付し、賛詩も翻訳せずそのまま掲載されている。本書は中国文学評釈書として、中国語学習者あるいは中国語基礎を持つ人々に向けた本であったため、久保は意識的にこのような翻訳法を採ったかもしれない。また、当時の漢文評釈書は、ほぼ原文を掲載し、つけられた評釈は文筆の鑑賞、字句の解読、訓読の読み方などの内容が多い、日本語訳文はあまりなかった。しかし、1906年の『三国志演義』には、原文の代わりに、訓訳に近い日本語訳文が掲載されている。久保が書いた評釈は、漢文字句の解釈や読み方にはあまり触れず、主に物語のあらすじの説明と文筆の鑑賞である。このため、本書は評釈書である一方、『三国志演義』の抄訳本とも言えるだろう。

この後、久保天随は『三国志演義』全書を翻訳し、『新訳演義三国志』と名づけて、「新訳漢文叢書」シリーズの第十二、十三編として、1911年６月に上巻、1912年10月に下巻、全２冊の形で至誠堂より出版した。筆者は初版以外の版本は見つけていないが、1911年の初版が発行した後、再刊することはなかったと推測する。この訳本は近世小説の文体に従い、訳文は軍記物語の口調、つまり文語文で書かれている。1906年版と同様、賛詩は翻訳していないが、訓点と傍訓を施している。それに対し、1906年版は訓点のみを施しており、傍訓はない。しかし、書簡と上表文については、1906年版に翻訳されているが、1912年版には翻訳せず、賛詩と同じ処理方法を行った。

また、『新訳演義三国志』の序文は32ページ、８節ほどの量がある。この序文では、初めて毛宗崗本に取り組もうとした久保天随の意気込みが見られる他、当時の『三国演義』や『通俗三国志』に対する理解が窺え、序文と言うより、『三国志演義』に関する論考と言える。序文に久保は『通俗三国志』を「塗澤の極は冗漫に失し、原書も妙味は、殆んど求め難きに至らむとす、これ豈に譯文として妙なるものならやむ」、「訳本の常として、文辞朴拙、もとより諷誦に値せず」と評価した一方、自分の新訳について、「字を逐ひ、句に随ひ、毫も刪去せず、なほ時に旧本諸書を参酌するところあり。加ふるに、引抄するところの詩詞古文の如さ、すべて挿入して、務めて原書の体裁を損せざるを期しぬ。」と説明しており、「本書は、集めて之を大成したるものといふべく、庶幾はくは、以て三国演義和訳の成本となすを得むか。」と自己評価している。ここで、筆者は1906年の『三国志演義』を媒介として、『通俗三国志』と久保天随の訳文、原文十数回の内容を対比し、具体的にどのような特徴があるか分析を試みる。[14)]

現代に見られる『三国志演義』はほぼ毛本である。

14）筆者が選んだ『通俗三国志』の版本は博文館編集局の『校訂通俗三国志』である。この校訂本は、文山が省略した訳文と賛詩をある程度補足し、上下二巻の正文は合わせて1928ページの量があり、1893年に初版が発行されて以来、1908年まで、11回で再刊した。

まず、以下二つの例を通じて、全体的な翻訳特徴を説明する。

表１　例１

原文	**行**无**数里**，**忽然朔风凛凛**，**瑞雪霏霏**。**山如玉簇**，**林似银妆**。
三国志演義（1906）	**行**くこと**数里**もなくして、**忽然朔風凛凛**、**瑞雪霏霏**。**山**は**玉簇**の**如**く、**林**は**銀粧**に**似**たり。
新訳演義三国志（1912）	かくて行くこと数里ならざるに、忽ちにして、朔風凛凛、瑞雪霏霏、山は玉の簇るが如く、林は銀を粧へるに似たり。
通俗三国志（文山訳）	**五里ばかり出たまふに**、朔風凛々として**雪を吹事しきりに**。山は玉を種たる如く。林は銀を粧ふに似たり。

例１は「草蘆三顧」より、環境描写の翻訳である。比べると、1906年の『三国志演義』は原文の実義がある漢字を全部保留し、「朔風凛凛、瑞雪霏霏」のような漢文語彙は、翻訳せず、そのまま引用した。1912年の『新訳演義三国志』には、少し接続詞や助詞を加えはしたが、「朔風凛凛、瑞雪霏霏」はやはり翻訳しなかった。一方、文山の訳文には、「行無数里」を「五里ばかり出たまふに」に言い換え、「朔風凛凛、瑞雪霏霏」を「朔風凛々として雪を吹事しきりに」と和語化する翻訳法が見られる。

表２　例２

原文	**孔明乃披鹤氅**，**戴纶巾**，**引二小童携琴一张**，**于城上敌楼前**，**凭栏而坐**，**焚香操琴**
三国志演義（1906）	**孔明乃**ち**鶴氅**を**披**き、**綸巾**を**戴**き、**二小童**を**引**き、**琴一張**を**携**へ**城上敵楼**の**前**に**於**て、**欄**に**憑**つて**坐**し、**香**を**焚**いて**琴**を**操**る。
新訳演義三国志（1912）	孔明、みづから鶴氅を披き、綸巾を戴き、二小童を**引き具し**、琴一張を携へて、城上の敵楼に**上り**、欄に憑つて坐し、香を焚いて琴を**弾じける**。
通俗三国志（文山訳）	みづから華陽巾をいただき、鶴氅を披て、二人の童子を**左右におき**、琴を携て高櫓に上り、欄干によりて香を焚き。**端然として**坐しければ。

例２は「街亭の戦」より、諸葛亮の行動描写の翻訳である。1906年の『三国志演義』は同様で、原文の漢字をほぼ保留した。1912年の『新訳演義三国志』は、主に1906年版の訳文に従っているが、「上る」や「弾じける」などの動詞を入れ替え、訳文として1906年のより多少自然になったと言えるだろう。一方、文山の訳文には、言い換え処理と自身の補足が見られる。文山は動詞「引」を翻訳せず、「左右におき」と言い換えた。また、原文の中で諸葛亮の神態に関する描写がないが、文山自ら「端然として」を加えた。

以上挙げた例は、決して特例ではなく、久保の訳文の一般像である。湖南文山は翻訳するとき、自分が理解しにくい部分、誤訳しそうな箇所については、省略や言い換え処理をした。また、文山の訳文には、かなり原文に則した簡潔なものになった部分がある一方、言葉を補って

おり、冗長な部分もある[15)]。久保の訳文を全体的に見れば、確かに久保本人が言った「字を逐ひ、句に随ひ、毫も刪去せず」のとおり、逐語訳という理念を貫いており、削除や自分の補足もあまり見られないようである。一方、『通俗三国志』には、原文と比べ、言い換えや和語化、補足などの処理方法が所々に見られる。

細部における特徴については、漢字語彙の処理が最も目立っている。四字からなる漢文と固有名詞の翻訳について，久保は基本的に原文保留の方法で処理した。もちろん、現代の視点から見れば、『通俗三国志』には漢字語彙を直接引用した箇所は多くあるが、多くの漢字語彙は文山によって言い換え或は和語化の処理方法で翻訳された。しかし、久保天随は四字語彙について文山以上に和語化するつもりがなかったようである。久保天随の訳文では、大量の四字語彙（熟語に限らず）はそのまま掲載され、あるいは字面に従い、簡単に仮名を加えて和語化する。例えば、「長吁短嘆」を「長吁短嘆する」、「偎偎倚倚」を「偎偎倚倚として」とそのまま訳した。文山が漢字語彙を保留したところは、久保も全部保留し、文山が言い換えや和語化で翻訳したところも、久保は漢字語彙を保留した。そして、「粧匿」や「繡簾」、「櫃甲」などの固有名詞について、久保は翻訳、注釈せず、ただ音読の傍訓を付け、原文のまま保留した。

また、文脈上では『通俗三国志』に省略や言い換えの処理方法が用いられているのに対し、久保天随は一切採用せず、完全に原文に忠実であり、「字を逐ひ、句に随ひ、毫も刪去せず」の宣言を貫いているようである。

表３　文章の補足と修正の例

	原文	『通俗三国志』	『三国志演義』（1906）	『新訳演義三国志』（1912）
1	忽见**窗外池中照一人影，极长大，头戴（有）束发冠；偷眼视之**，正是吕布（见吕布潜立于池畔）	忽ち呂布が立たるを見て	忽ち見る窓下池中一人影、極めて長大、頭に束髪冠を帯ぶを。眼を偸んで之を視れば、是れ呂布。	**その窓の下なる池の中に、極めて長大なる一人の男、頭に束髪冠を帯びたるが明らかに映りければ、眼を偸んで之を視るに、**まさしく是れ呂布なり
2	**丞相所拨人役（原拨扶持人），皆不带去**，只带原跟从人（二十人，小车一辆），**及随身行李，出北门去了**	はじめ従へきたれる二十余人の士卒を引て、家を出て落行たり	丞相撥せしところの人役、皆帯び去らず、只だ原従の人及び随身行李を帯び、北門を出て去れり	**丞相より遣されし人々は一人も召し具せず、**もと従へ来りし士卒のみを引率し、**身まわりの行李少々を携へ、北門より出て住きぬ**
3	程秉**抱头鼠窜**，逃回东吴	程秉は、事の叶はざるを見て、震ひ恐れて逃げ回る	程秉、頭を抱いて鼠竄し、回って	程秉は、事の叶はざるを見て、**頭を抱いて鼠の如く**に逃げ回り
4	泪**如泉涌**	大いに哭く	涙泉の湧くが如し	降りそそぐ涙は、**泉の湧き出づるが如し**

上の例のように、文山は原文の一部を省略し、久保は原文に従って翻訳した。例えば、１の

15）上田望「日本における『三国演義』の受容（前篇）── 翻訳と挿図を中心に」（『金澤大学中国語学中国文学紀要』、第９号、2006年）、１-43頁。

原文は貂蟬が先に呂布の倒影を見た後、呂布の到来に気づいた場面であり、服装の描写もある。『通俗三国志』ではこれを省略し、直接に貂蟬は呂布を見たと訳した。また、３、４の例では、久保は「抱头鼠竄」のような四字熟語、または「泪如泉涌」のような修辞を補足して翻訳した。

一方、『通俗三国志』には、文山自ら補足した内容がある。久保天随は省略や言い換えの翻訳方法を採用しなかったが、文章の流れの通りを良くするためか、あるいは『通俗三国志』の補足内容が気に入ったためか、多くとは言えないが、いくつかの補足内容がある。また、完全に原本に忠実であった1906年の『三国志演義』を見ると、『新訳演義三国志』で補足した部分はないため、底本の違いにより起こった差異の可能性が排除でき、確実に原文への補足内容であると確認できる。以下二つの例を挙げる。

表４　久保天随の補足の例

	原文	『通俗三国志』	『三国志演義』（1906）	『新訳演義三国志』（1912）
1	今晚又见行坐不安，因此长叹	今夜又悶へ苦しみ給ふ気色見え候ゆえ、**若男の身にてもあらば、命を棄てて助け申さむと思ひ、**このゆへに嘆きしなりと云ければ	今夜の行坐安からざるを見、因つて此に長嘆し	今夜また行坐安からざるを見、**もし男にてあらば、命を棄てても助け申さむと思ひ、**わが身の甲斐なきを嘆きしに
2	猿鶴相亲，松篁交翠（松篁交翠，猿鶴相亲）。观之不已	松竹翠を交へ。猿鶴の遊び楽む景色。**まことに浮世の外におもはれ。**	猿鶴相親しみ、松篁翠を交ゆ。之を観て已まず	猿鶴相親み、松篁翠を交へ。**まことに浮世の外におもはれて、**覚えず眺め入りける。

例えば、１のように、原文の中に「若是男儿身，必能舍命相助」というような話しはないが、『通俗三国志』には「若男の身にてもあらば、命を棄てて助け申さむと思ひ」という文がある。同様の文は、『新訳演義三国志』にもある。また、２の例には、原文には環境に対する「まことに浮世の外におもはれ」という感嘆はないが、『通俗』と『新訳』にはある。訳文を対照した結果、久保の補足文はほぼ『通俗三国志』と一致しており、久保自らの補足はないようである。これを見れば、久保は『新訳演義三国志』を翻訳する時、確かにある程度に『通俗三国志』を参考したと言えるだろう。

全体的に見れば、久保の訳文に省略や言い換え処理をした所はほとんどなく、補足文は少量あるが、ほぼ完全に原本に忠実な逐語完訳本と言える。完全に逐語訳し、原本に忠実であることも久保の訳本の最大の特徴である。しかし、この最大の特徴も同時に、最大の問題点になる。久保のやり方は、大量の漢字語彙及び中国流の字句をそのまま保留し、あるいは訓読に近いものに直訳することである。例えば、「粧匳」という嫁入り道具を表す語を、『通俗三国志』では「歌舞粧ほひの道具」と言い換え、確かに別のものになったが、日本の読者にとって理解しやすくなったと考えられる。久保は原文に従ったが、翻訳せず、「粧匳」をそのまま保留し、ただ「さうれん」という傍訓を付けた。「原書の体裁を損せざる」の結果、大量の漢字語彙がある訳文は一般の読者にとって、読書の障害が増えてきたのではないかということは想像に難くない

だろう。

『新訳演義三国志』の「新しさ」については、二つの点に現れている。一つ目は『新訳演義三国志』の底本は「毛宗崗本」ということである。当時の主流であった『通俗三国志』の底本は「李卓吾本」なので、一般人は「毛宗崗本」を読みたいならば、中国語の原本を読むしかなかった。『新訳演義三国志』が出版されて以後、中国語が分からない人にも、「毛宗崗本」を読むことができるようになった。二つ目は最大限に『三国志演義』の原貌を読者に示しているということである。『通俗三国志』の底本は「李卓吾本」というが、文山が増減や言い換え処理をしたところが多くある。久保天随は修辞方法も、四字熟語も、変更せず、原文の語をそのまま使って翻訳し、読者は原文の文筆を鑑賞でき、久保が言ったように「原書の妙味」を味わうことができる。しかし、『三国志』と『三国志演義』の関係をあまり認識していない[16] 一般民衆にとって、李本と毛本の区別、または原文の語句や筆致に、さほどの意味はなかったのではないだろうか。

三　『新訳水滸全伝』と『通俗忠義水滸伝』の比較

『新訳水滸全伝』は1911年と1912年、ほぼ『新訳演義三国志』と同時期に出版され、上下二冊に分け、「新訳漢文叢書」シリーズの第九、十編として至誠堂より出版された。初版発行以降、数回再版された。『新訳演義三国志』と同様、久保は正文の前に64ページの「叙説」[17] を著し、水滸伝に関する諸問題を説明した。序文に、久保は日本において『水滸伝』のいい訳本がないと言い、当時の主流であった岡島冠山訳『通俗水滸伝』は「朴拙にして、諷誦を値せず」と評価した。自分の新訳に「これを旧訳に比すれば、全く面目を一新したるを確信す。」という自信があったようである。また、翻訳の底本について、久保は「叙説」に主に金聖歎の七十回本を参照したことを説明したが、他の版本も参考し、最終的に『新訳水滸全伝』は百二十回本のかたちになる[18]。中村綾氏[19] の研究により、江戸時代には百二十回本こそが『水滸伝』の最高のテキストである、と見なされ尊ばれたようであるが、その一方で、通説では宝暦頃より金聖歎本が流行したとされる。百二十回本を尊び、かつ金聖歎本の流行を取り入れたことは当時の訳本の傾向のようである。

久保は序文で岡島冠山訳の『通俗忠義水滸伝』を批判した一方、この訳本が当時の主流でもあることを指摘した。『忠義水滸伝』と『通俗忠義水滸伝』の訳者が岡島冠山であるかどうかは

16）幸田露伴『新訂通俗三国志』（東亜堂書房、1911年）、「小引」。

17）序文のことである。かたちは『新訳演義三国志』の序文と同じ、８節に分けて諸問題を説明した。

18）『水滸伝』は主に七十回本（金聖歎批評本）、百回本（李卓吾批評本）、百二十回本（忠義水滸全伝）という３種類がある。

19）中村綾『日本近世白話小説受容の研究』（汲古書院、2011年）、91頁。

長年にわたり考察の対象となってきたが、近年の研究より、岡島冠山の翻訳ではないということが確定してきている。

表５　『水滸伝』関連刊行年表（中村綾2011より引用）

1727年	『水滸伝釈解』（岡白駒口授）	
1728年	『忠義水滸伝』初集。同年、岡島冠山没	第１回より第10回まで
1757年	『通俗忠義水滸伝』初編	百回本の第31回末まで
1757年	『忠義水滸伝解』（陶山南涛）	
1759年	『忠義水滸伝』第二集	第11回より第20回まで
1772年	『通俗忠義水滸伝』中編	第32回より第67回末まで
1784年	『通俗忠義水滸伝』下篇	第68回より第95回末まで
1790年	『通俗忠義水滸伝』拾遺	百二十回本の20回分と百回本の残り５回

上の刊行年表のとおり、『忠義水滸伝』は日本における受容史の始まりという重要な書物であると考えられる。初集は第十回まで、訳者は岡島冠山であるという定論がある。しかし、第二集は第二十回までであり、出版時間は冠山の没後三十年である。初集に続き冠山の作品と思われてきたが、確実な証拠はないようである。また、『忠義水滸伝』は訓点を施した和刻本であり、久保が指摘した『通俗忠義水滸伝』の出現も冠山の没後半世紀のことである。中村氏の研究成果により、『通俗忠義水滸伝』の翻訳者について、通俗本の正編には、見返しに岡島冠山の名が記されているが、今では、通俗本の翻訳者は冠山ではない、という見解が一般的である。つまり、久保は岡島冠山の翻訳を批判したが、実際に当時流行していた『通俗水滸伝』の訳者は岡島冠山ではないと考えられる。したがって、本論では、『通俗忠義水滸伝』の翻訳者に関してはひとまず保留し、『通俗忠義水滸伝』の訳文のみに焦点を当て、久保が序文で述べた「全く面目を一新したるを確信す」とは、具体的に何を指しているのかを考えたい。もちろん、最初の『水滸伝』の訳本として、冠山の和刻本は後世に大きな影響を与え、『通俗水滸伝』には、白話語彙の訳し方のほか、詩詞韻文の訳解態度など、様々な面で冠山らしい痕跡が残されているのも事実なのである。[20] また、表から見れば、『通俗水滸伝』の底本は李卓吾の百回本であり、『拾遺』で百二十回本の分を補足したことが分かった。

まだ作業中のため、筆者は久保の『新訳』と『通俗忠義水滸伝』[21]、三回分の訳文を比較し、二三の例を挙げて久保の『新訳』の翻訳特徴を考察する。

『三国志演義』と『水滸伝』はほぼ同時期の白話小説であるが、文体に大きな違いが存在している。『三国志演義』は軍談小説として、廟堂、軍勢のことを描写し、文章はより文言風に近い、人物の対話も文言である。『水滸伝』は市井の好漢を描写し、人物の対話も大きく占め、数

20）中村綾『日本近世白話小説受容の研究』（汲古書院、2011年）、第一章。

21）筆者は1907年共同社より出版した校訂本『通俗忠義水滸伝』を使用して比較作業を行う。底本は李卓吾の百回本である。序文に「冠山の旧面目依然として紙上に活躍せり」という翻訳理念を述べている。

多くの方言、俗語があり、より白話的と言える。このため、『新訳演義三国志』で久保がなるべく漢字語彙を保留したという特徴に対し、『通俗水滸伝』と比べ、『新訳水滸全伝』には原文の漢字語彙を保留するという特徴があまり見られないようである。

では、全体的に『新訳水滸全伝』はどのような特徴があるか、以下の例で分析する。

表６　例３

原文（百回本）	智深望见，大吼了一声，却似嘴边起个霹雳，大踏步抢入来。**众人初时不知他是军官出身，**次后见他行得凶了，慌忙都退入藏殿里去，便把亮槅关上。智深抢入阶来，一**拳一脚**，打开亮槅，**三二十人都赶得没路。夺条棒，从藏殿里打将出来。**
『新訳水滸全伝』（久保訳）	智深は是を見て、ふたたび吼る、霹靂の如く、大踏によろめき来れば、**衆人も、そのはじめ、彼は軍官（ぶし）の出身なることを知らず、**今面あたり勇き形状を見て、忽ちに辟易し、慌忙きつつ蔵殿の裏に退きかくれ、亮槅を盾にして、近づけじとうろたへ騒ぐを、智深は、階をよろめき上り、**拳と脚とを飛ばして、**亮槅を開けば、**二三十人の者ども、逃げろ路なく、すくみ居けるに、忽ち件の棒を奪ひ取りて、蔵殿の裏より敲き出しぬ。**
『通俗水滸伝』	魯智深これを見て、大に怒り、吼る聲は霹靂の如くにして、大踏歩て進来る。衆人、魯智深が十分に兇猛なるを見て、大に怕れ、盡く蔵殿の裏に逃入て、亮槅を閉しけり。魯智深すでに堦の上に上りて、亮槅を踢開き、一根の棒を奪取て、二三十人の者共を四方に打散す。

これは『水滸伝』第四回「趙員外重修文殊院　魯智深大閙五臺山」より、一段の訳文の比較である。久保の訳文と原文を比べると、一句ずつ対応している。それに対し、『通俗水滸伝』には省略と改写が見られる。太字のとおり、原文に「衆人初時不知他是軍官出身」という句があり、久保はそのまま翻訳した。『通俗』では翻訳せず、省略した。また、「一拳一脚、打開亮槅」という句は、『通俗』では整合して「亮槅を踢開き」と訳された。最後の一句も、語順の変換と言い換えが見られる。そのほか、下線部のように久保自分の言い換えや補足も見える。

比較した三回分により、久保はなるべく原文の内容を省略せず翻訳していることが分かった。しかし、文章の流れの通りを良くするためか、あるいは俗語、方言の意味を確認できないためか、『新訳演義三国志』と比べ、『新訳水滸全伝』は言い換えと補足の箇所が顕著に増えてきた。当然、全体的に見れば、『新訳水滸全伝』は文章の流れにおいて、確かに『通俗』より、原文に忠実である。

細部における翻訳特徴については、俗語の処理が最も目立っている。以下にいくつかの例を挙げて説明する。

表７　俗語の処理

原文	**『通俗忠義水滸伝』**	**『新訳水滸全伝』**
大娘子	夫人	大娘子（ほんさい）
腌臜潑才	腌臜者（けがらわしきもの）	腌臜しき潑才（むさくるしきわるもの）
不爽利	なし	吝（しは）き奴
消遣	戯弄（たわむれ）	消遣（なぶ）る
拖地跳将下来	なし	蔫地（まつしぐら）に
直娘賊	なし	直娘賊（くそぬすびと）
破落戸	なし	破落戸（ならずもの）
莊客	役者	莊客（しもべ）
口中**淡出鳥来**	我口も淡して勝がたし（なし）	口中空しく屎水を出しぬ
耍	是耍（これたはむれ）	戯弄（ばぶ）り

表を見れば、『通俗』は大量の俗語を翻訳せず、直接省略したことが分かった。それに対し、久保はほとんど保留した。処理方法について、久保の場合は大きく二種類ある。

① そのまま漢字語彙を保留し、傍訓のかたちで解釈する。例えば、「大娘子」の傍訓は漢字語彙の音読ではなく、「ほんさい（本妻）」と付けた。他にも「莊客」は「しもべ（僕）」、軍官は「ぶし（武士）」のように俗語を処理した。このような処理方法は『新訳演義三国志』と大きな違いがある。第二章で述べた通り、『新訳演義三国志』の大量の漢字語彙の傍訓はただ音読であり、例えば「粧匿」の傍訓は「さうれん」、「館驛」の傍訓は「くわんえき」など、意味の解釈はない。

② 自らの理解にしたがって、言い換える。例えば、「不爽利」を「吝き奴」、「鳥」を「屎水」に訳した。

それ以外にまた、『新訳水滸全伝』では賛詩を載せず、全部省略した。これによって、『新訳演義三国志』のように連続の二三ページの漢文訓読が続くという状況にはなっていない。

ここで比較した分を見るかぎり、久保の新訳の最大の特徴は『新訳演義三国志』と同じ、逐語完訳し、最大限に『水滸伝』の原貌を読者に示しているということである。しかし、『新訳演義三国志』と比べ、久保は『新訳水滸全伝』に、大量の漢字語彙及び中国流の字句をそのまま保留すること、あるいは音読に近いものに直訳することを避けたと言えよう。

おわりに

久保天随の経歴や著作を見るかぎり、久保の本業は翻訳ではなく、また、翻訳の経験、特に漢文小説の経験は少ないことが分かった。久保の翻訳作品を全体的に見れば、西洋文の翻訳については、あまり字句に拘らず、その西洋作品の日本語訳がなかったため、作品を読者に紹介することを第一目的としており、作品によって多様な訳風が見られる。しかし、漢文の翻訳につ

いては、ある執着心を持っていたようである。原文に忠実に逐語訳することを再三に強調した。

『新訳演義三国志』最大の翻訳特徴は完全に逐語訳し、原本に忠実であることである。省略や言い換え処理をした箇所はほぼなく、補足文も少ない。大量の漢字語彙は翻訳せず、そのまま保留したことも特徴である。一部は、確かに『通俗三国志』の訳文を参考したが、全体的に見れば、底本が変わり、全面的な新訳本であった。それにも関わらず、『新訳演義三国志』は後世ほとんど顧みられることがない。

では、久保天随の『新訳演義三国志』は時代に消えた原因を、外部原因と内部原因両方面から分析する。

1　外部原因

1912年、ちょうど明治から大正へと時代が引き継がれていた頃、言文一致運動はまだ発展、活発化していた時期である。明治時期の翻訳界を見れば、二葉亭四迷を代表とする、「原文の字句を尊重しべき、これ以上で原作の風格を再現する」という翻訳観、及び森鴎外を代表とする、「原文の字句に拘らず、原文の風格を把握したうえで、読者の分かりやすさのため、訳者自らの削除と補足が必要」という翻訳観、主にこの二つがある。特に森鴎外は、「翻訳というのは、決して原文の字句を順番に運んでくることではない」[22] と主張し、久保の翻訳理念と逆である。そして、言文一致運動の影響を受け、森鴎外の翻訳理念は徐々に翻訳界の主流となった。『新訳演義三国志』のような翻訳法は、当時の時代潮流と相違したと言えないが、次第に認められなくなっただろう。

また、『新訳演義三国志』は近世の軍記小説のかたちを継承し、文語文で翻訳されている。1912年前後、同じ文語文で書かれている『通俗三国志』は５年の間に５回で校訂、出版され、人気は盛んであったことが窺える。しかし、20年代以降には、ただ一度、1940年に再版されただけである。他の再話の登場にも関係がある一方、言文一致運動の影響で、文語文の小説より、読者は更に口語体で書かれるものを好むことになったためだろう。

また、20年代から各種類の再話が出現したことにも関係がある。20年代以前、『三国志演義』の関連書物はほぼ『通俗三国志』と久保の訳本しかなかった。20年代から、特に30年代に大人向けの再話の出現により、読者の選択は増える。考えて見れば、漢学者や研究者ではない一般読者は、当然更に読みやすく、面白い再話を選ぶだろう。特に吉川英治の『三国志』、日本の一般民衆に大きな影響を与えた。当時、多くの人は吉川『三国志』を正統的な『三国志』と思い、戦後立間祥介は『三国志演義』を翻訳した際に、読者の手紙をもらって、「なぜ前に見た『三国志』と違い、面白くないのか」と質問されたことがあるようである[23]。

吉川英治は少年時代に久保の『新訳演義三国志』を愛読したと述べ、年齢から見れば、1912

22）吉武好孝『明治大正の翻訳史』（研究社、1959年）、155頁。

23）趙蛍「《三国演義》在日本的訳介于研究」（天津師範大学、2012年）、39頁。

年に吉川は二十歳で、『新訳演義三国志』が初めて販売されたときにすでに手に入れていただろう。一方、筆者の調査によれば、再刊されることはなかったようである。そこで、『新訳演義三国志』は1912年に出版されて以後、最初の数年に多少人気があり、20年代以降、次第に消えてしまったという情況が推測される。

2　内部原因

まず、久保の翻訳法に関係がある。『新訳演義三国志』は1906年の『三国志演義』と異なり、一般の読者に向けた訳本である。しかし、第三章で分析した通り、久保は原文の風格を最大限に再現しようとしたため、大量の漢字語彙や中国流の修辞を翻訳・注釈せず、そのまま引用した。一般の読者にとって、分かりにくい部分は『通俗三国志』より、更に増えていた恐れがある。

また、第一章に書いた通り、久保の本業は翻訳ではないことである。久保の本業は漢学であり、もちろん漢文に精通しているが、漢文の翻訳も同様に得意ということわけではない。久保の翻訳作品は７作のみであり、漢籍の翻訳は『三国志演義』と『水滸伝』しかない。久保一生涯の100近くの著書の数と比べると、久保の翻訳の経験は多いとは言えないだろう。なお、久保自身が漢文に精通していることこそ、直訳しすぎる原因となったという可能性もある。久保の生涯を振り返って見れば、売文時期の久保天随は、社交を避け、漢籍と伴う生活をしていたため、自分の訳文は直訳すぎるとは思わなかったのだろう。

最後に、久保天随は『新訳演義三国志』に、どのくらい集中し時間をかけたのも問題である。確かに、久保は勤勉であるが、『新訳演義三国志』が発行された1911・1912年、この２年間に、また『荀子新釈』（中下）、『孫子新釈』、『白氏評釈』、『新譯水滸全傳』（上下）、『詞華類典』、『新訳日本外史補』、『新式大辞林：読書作文』、『三体新書翰』という、８冊の著書を出版した。これに比べ、文山は３年間に渡って『通俗三国志』を翻訳し、小川環樹は10年を費やして『完訳三国志』を完成したのであった。

『新訳水滸全伝』には、管見のかぎり1911年初版発行した以降、少なくとも六回の再版がなされ、『新訳演義三国志』より売れたそうである。江戸時代から『水滸伝』の人気は確かに『三国志演義』より高いという理由があるかもしれないが、久保は『新訳水滸全伝』に、大量の漢字語彙及び中国流の字句をそのまま保留することや、あるいは音読に近いものに直訳することを避けたことも重要な一点と考えられる。『新訳演義三国志』の発行時期は1911年６月、『新訳水滸全伝』は10月、その間の４ヶ月の差がある。この期間に、久保自身が反省したのか、フィードバックを受け入れたのか、あるいは元々久保が違う翻訳方法を採用するつもりだったのか、理由は確認できないが、『新訳演義三国志』と比べ、『新訳水滸全伝』の翻訳方法は確かに変わってきた。

本論では、『新訳水滸全伝』に関しては一部の調査結果に基づいての考察であり、まだ分析の

不足があるので、さらに範囲を広げて調査することが今後の課題である。ただし、現時点で筆者は、1918年以降の『新訳水滸全伝』の再版を確認できておらず、『新訳演義三国志』と同様、外部原因の衝撃によって、存在感を失い、消えてしまったのだろうということは指摘し得るだろう。